

息の緒に思ふ

白雪の 降り敷く山を 越え行かむ
君をそもとな 息の緒に思ふ

(巻十九・四二八二)

「白雪が降りつもっている山を越えているだろうあなたを、無性に命をかけて思い慕っています」という意味の歌だが、大伴家持はこの歌を作って、橘諸兄に添削を求めた。諸兄は、下の句を「息の緒にする」とした方がいいとはじめに伝えたが、のちに「もとの案がいい」と撤回した。

日本古典文学全集本の解説によると、サ変動詞のヌには「思う」と解せる使い方もあるらしい。しかし状態を説明する修飾句のなかには用いるが、述語格に置くことはできないかと諸兄が思ひ直し、初案を撤回したのではないか、という。



くめ たかみふきやまこふん
久米田貝吹山古墳

岸和田市にある古墳中期の前方後円墳だが、諸兄が久米田寺に葬られたという伝説から、諸兄塚とも呼ばれている。

このエピソードからは、短歌一首を完成するまで、神経を研ぎ澄まし宝玉を彫琢するかのような繊細さをもつて言葉を選び、さらに他人の意見をも求めてまで推敲しているという真剣な制作過程が垣間見られておもしろい。

それよりおもしろいのは、諸兄と家持の関係である。この歌は天平勝宝四年(七五二)晩冬の作だが、諸兄は正一位左大臣として政界の首座にあり、

家持は従五位上少納言にすぎない。

橘氏はもと皇族で、諸兄を祖とする新興氏族である。歴史が浅すぎて大伴氏との姻戚関係などない。太政官では閣僚と事務官という統属関係にあるが、身分差がありすぎる。ふつうならば、顔を見知っていたとしても、交流があるとまで思えない。歴史学の立場では、とくだんの関係を予測しえない所だ。

それがこの万葉歌をめぐるやりとりや天平二十年(七四八)に左大臣橘家から越中国司館の家持に対して田辺福麻呂が使者として派遣されていることなど、『万葉集』の記載を通じて、諸兄と家持の歌を介した師弟関係、心の通じあう交流が知られるのである。

このほぼ三年後に諸兄は失脚し、四年半後には子・橘奈良麻呂が乱を起こした。家持はそれらの事件を傍観者として見過ごしたが、その心のなかなは大きく揺れ動いていたにちがいない。

(万葉古代学研究所総括研究員